



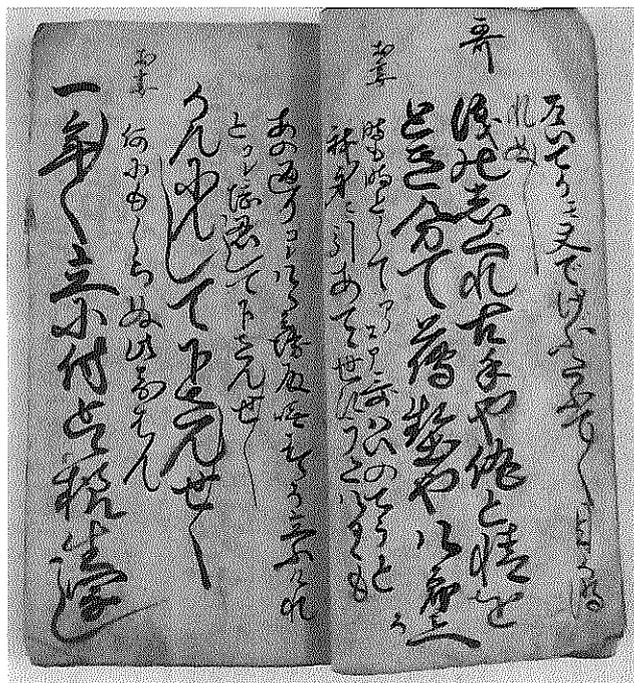
第15回 登米市民劇場「夢フェスタ水の里」

歌舞伎役者

# 助高屋 宇藤留蔵

～「登米芝居の祖」誕生秘話～

「夢フェスタ水の里」は、脚本・出演・運営を地域の人々がボランティアで支える手づくり舞台です。登米市の歴史、文化、自然をテーマに取り上げています。



菩提寺の林昌院（登米市迫町佐沼）に今なお残る芝居の台本

## あらすじ

時は1848年（嘉永元年）。ところは登米郡（とよまごおり）森村の大網。芝居小屋「京楽座」の座長・宇藤留蔵（うとう・とめぞう）が危篤との知らせを聞き、留蔵を師匠と慕う多くの村人たちが集まっていた。

留蔵は、上方で一世をふうびした歌舞伎役者。耳の病で引退を決意し、故郷に帰ってきた。留蔵はここで静かな余生を送るはずであった。ところが、村人たちに芝居の指導をせがまれ、引き受けることに。指導していくうちに、留蔵の中で眠っていた「芝居の虫」が騒ぎ始めた。とうとう、村人たちと芝居小屋「京楽座」を興したのだ。

しかし、歌舞伎役者・宇藤留蔵が誕生するまでには、知られざる物語があった。43年前、18歳の留蔵は、故郷を後にし、一人、芝居の世界に飛び込んだのだった…。

## 「夢フェスタ水の里」とは

毎回、募集に応じた100人前後のボランティアが、キャストから裏方までをこなす市民の手づくり事業。旧各町に残る民話・実話・逸話などを掘り起こし、新しい視点を加えて発信してきた。

平成11年3月、旧迫町の鹿ヶ城を題材にして「さいかちの木は風にゆれて」が初上演された。その後、登米市の旧9町の文化や歴史を題材にした公演が一巡した。新たな取り組みを模索しながら、今年度で15回目を迎える。公演のモデルは岩手県遠野市の創作劇「遠野物語ファンタジー」。

「市民が主役」をモットーに、登米市で最も利用されている登米祝祭劇場。そこで繰り広げられる最大級の芸術文化イベントだ。

公演では、大網おいとこ踊り、森邑おいとこ踊りが競演します。旧迫町に残る2つのおいとこ踊りの違いをお楽しみください。



今回の公演に参加いただけるスタッフを募っています。役者のほかにも舞台を裏から支える大切な制作・運営・広報・宣伝などの仕事がたくさんあります。ぜひ参加して、仲間とともに成功の感動を分かち合いましょう。

※お問い合わせ 登米祝祭劇場 ☎0220 (22) 0111